滋賀文化財だより
NO. 178
1992. 10. 12
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

202. イスラエル考古事情(2)

—発掘調査と埋蔵文化財行政—

1. はじめに

イスラエルは、その建国・独立の経緯から広く知られているように、民族の歴史とその前史は、イスラエル国民のみならずユダヤ人にとって最大の関心事である。このため文化財の保護と調査は、中国やヨーロッパ諸国にも増して活発である。

古い統計ではあるが、日本の四国ほどの国土で1976年度には百数十件の発掘が行われている。工事を中止して緊急発掘調査を実施するのは、日本とは異なり、国の機関の一つ古物局である。ここでは地表下50cm以下の埋蔵文化財は規制があり、これはイギリス統治時代から受け継いだ法律に基づいている。また、地勢上ヨーロッパ・アジア・アフリカの接点に位置しているため、国内のみならずヨーロッパ・アメリカ・日本などからの調査団にも発掘調査の門戸を開いており、こうした成果もイスラエルの文化財保護と考古学研究に果たす役割は大きいようである。

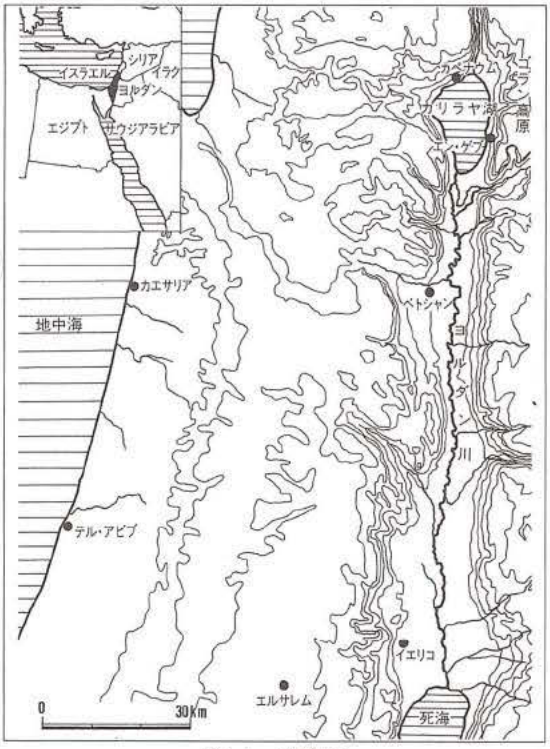

図-1　位置図

調査された遺跡は、特にこの国の成立事情から公園として都市計画の中に組み入れられたりしながら保存・活用が図られることが多く、古物局の予算規模も大きいようである。

ガリラヤ湖東岸でこの夏、鉄器時代エン・ゲヴ遺跡の発掘調査が、日本とテルアビブ大学の調査団により実施された。わずか2日間ではあったがこの調査に参加することができ、テルと呼ばれる遺跡丘での層位的なイスラエルの発掘調査方法の一端を学ぶことができた。

2. エン・ゲヴ遺跡発掘調査

(1) 位　　置

エン・ゲヴ遺跡は、ガリラヤ湖東岸のキブツ・エン・ゲヴの中に所在する遺跡丘（テル：tel）である。

南北約250m、東西約120mの細長い楕円形の小丘を呈し、丘の高さはわずか数mしかないこのテルは、その丘端から湖まで最も近いところで約20mのところに位置する[1]。

(2) 組　　織

調査は、テルアビブ大学考古学研究所モシュ・コハヴィ教授を隊長とするゲシュル・プロジェクトの一部として行われた。

日本聖書考古学発掘調査団（団長：金関恕天理大学教授・大阪府立弥生文化博物館館長）は、エン・ゲヴ

エン・ゲヴ遺跡から見たガリラヤ湖

遺跡の主として鉄器時代の都市遺構を目指した調査を行い、今年は3年計画の最終年であった[2]。

約15名の考古学・宗教史・言語学等を専門とする団員と約35名の日本人学生を主体とするボランティアに加えて、フィールドアシスタントとして同大学のギル・コボ氏が参加していた。今回、彼らの宿舎であるゴラン高原のキブツ・アフィックに宿泊して調査に参加し、ユダヤ教の安息日（シャバット）を利用した週末のエクスカーションにも同行した。

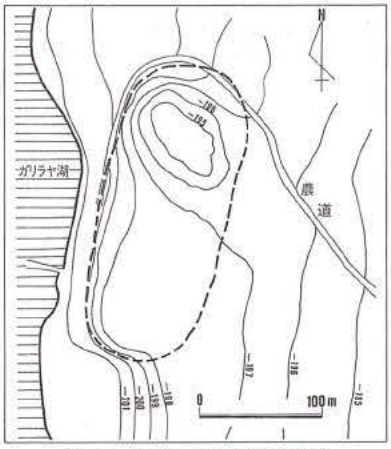

図-2　エン・ゲヴ遺跡位置図
（注(1)挿図を一部改変、破線は遺跡の範囲）

以下、この調査での特に方法論的な部分について、日本でのそれと異なる、あるいは極めて特徴的な工程・作業等に限って略述する[3]。

(3)　方　　法

発掘調査は、1名の団員と数名のボランティアが1単位として、各グリッドに配置されて、当地での調査方法にのっとり実施されていた。

5m四方のメッシュでグリッドを設定し、各杭はその基礎をコンクリートで固め、その上に絶対高を記入しておく。各グリッドの壁はボルクと呼び、幅1mほど掘り残して発掘を行っていく。もちろん調査の最終工程でこれらは取り外すことになる。

発掘作業は、測量・写真器材、文房具等を除いて現地調達された道具を用いて行う。ここでの土は乾燥して極めて固く、通常、日本で使用しているツルハシ、移植ゴテなどはすぐに使用不能になってしまうようである。イスラエルのものは全てにおいて厚く、重く、頑丈である。一輪車もそのバケットは深く、土砂の運搬には想像以上の力を要する。

発掘は、ローカス（Locas）と呼ぶ概念を基本に行われる。

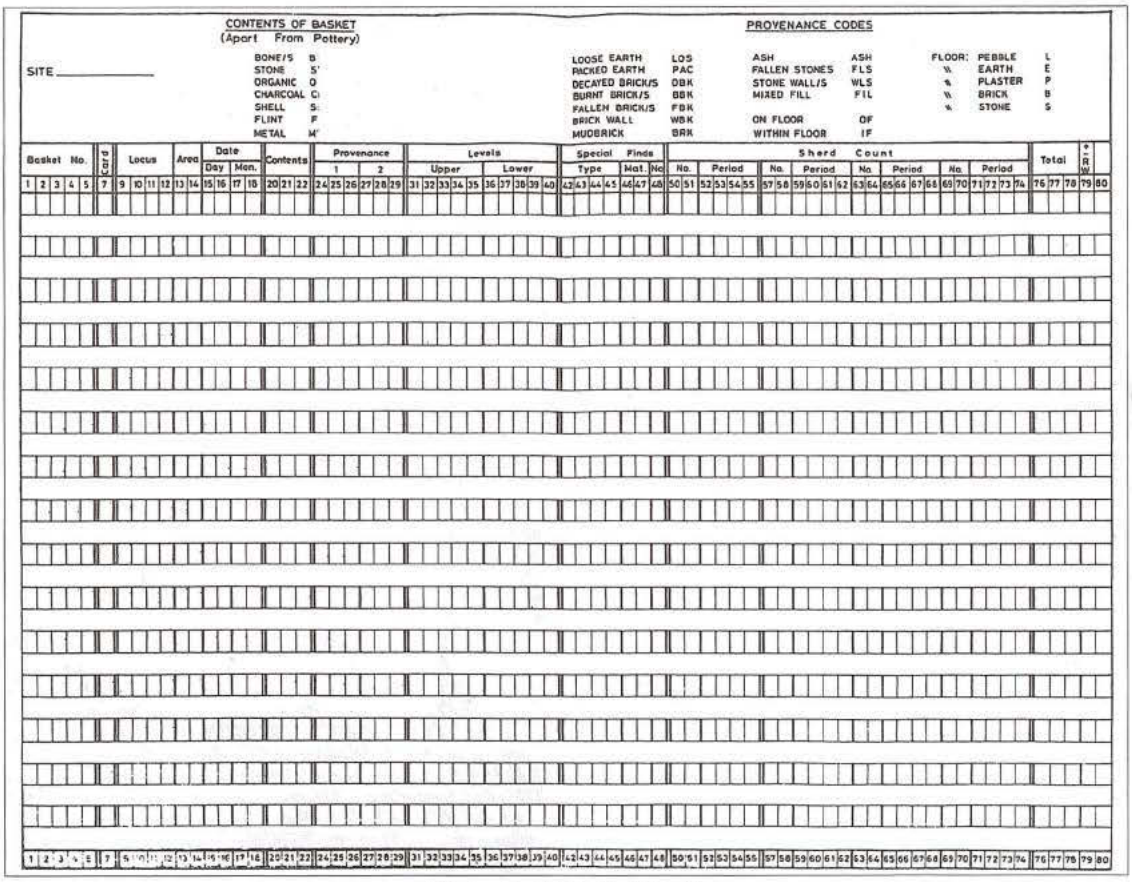

図-3　ローカス・シートの一例

調査用杭

遺物の洗浄

ソーティングの様子
（真中がフィールドアシスタント）

遺構あるいはグリッドのセクションなど、本来の遺跡を構成する部分や調査用の地区割等に基づくもの全てを含めてローカスとして捉え、それぞれにローカス・ナンバーを付し、作業を進め、遺物を取り上げる。これを担当するのが記録係というか登録者とでも言うべき担当であり、ローカス日誌や略図付き出土物用バスケットリスト等に順次書き込みを行い、各担当に指示を出す。

こうした一連の調査方法は、早く掘ることができ、遺跡の全容を早く摑むことが可能であると金関先生に教えられた。

(4) 整　　理

朝5時に宿舎を出発し、5時半には作業を開始する現地での発掘調査は、午前中に終了する。昼食・午睡をはさんで午後4時ごろから遺物洗浄や復元を行い、その後、検討会を全員で行う。

土器洗いは靴磨きのブラシに似たブラシで行われ、とにかく泥や石灰分を全て除去するようゴシゴシ洗う。紀元前の土器とはいえ、日本とは異なり瓦質あるいは陶質に近いため、ある程度こうした作業に耐えられる土器ではあるが、ブラシの毛部分で取れない部分は背面の木質部分で擦り取るため、木もすり減り角が丸くなってしまっていた。

検討会は団長によるその日の成果と今後の課題についての解説・検討に始まり、フィールドアシスタントとレジストレーターを中心としたソーティングに移る。前日の出土品をローカス別に検討し、復元品(R)、実測・保存用(+)、廃棄(−)に分けられる。

シリア・ハウスと呼ばれていた多くの弾痕が残る整理作業場の脇には、マイナスとされた土器の胴部片が散在していたのが印象的であった。

こうした作業の中で、土器1点ずつの帰属年代やその特徴をつかむための質疑応答も行われ、ボランティア学生の教育の場ともなっていた。また、夕食をはさんで夜8時ごろから週に一度、特定のテーマでレクチャーが行われているようで、今回はギル・コボ氏の鉄器時代のテルの話を聞く機会を得た。

3．埋蔵文化財行政

エン・ゲヴ遺跡発掘調査中に、天理大学金関恕教授からイスラエルの考古学事情と文化財行政全般にわたりご指導を受け、慶応大学小川英雄教授、天理大学置田雅昭教授らにも教えを受けた。

基本的にイスラエルの遺跡は、日本の、例えば琵琶湖沿岸の平野部のように、いたる所に遺跡が所在すると言う状況とは異なり、人類が痕跡を残すところは限られているようである。特に集落は水、交通路を中心とした立地・位置条件により、また以前に使用された城壁が新たな城壁の基礎部として利用されるために、同一場所に築かれてゆき、結果的に丘状を呈する。従って、遺跡であることの把握が容易で、範囲もある程度明確なものとなっているようである。

このため特にテルなどは、発掘され、政府直属の古物局（Authority of antiquity）の土地となり、どこもフェンスと看板により管理されている。日本的な規模での緊急発掘調査も近年増えているが、学問的あるいは国等にとって必要な動機により国が大学、研究所に指示して実施する発掘も多いようである。

考古学の分野は先史学、聖書考古学、古典考古学に大別され、それぞれの分野は互いに無関心に近い状況である。

大学の中心的な存在であるヘブライ大学とテルアビブ大学もそれぞれ考古学の学風に特色があり、聖書の記載を追っていく道を辿るのが前者のようである。また、互いに外国と結び付いて調査・研究を進めているようで、例えばヘブライ大学のベントール教授はスペイン系、テルアビブ大学のケンピンスキー教授は主にドイツ系、コハヴィ教授は日本、アメリカ、フィンランドとの結び付きが強いと言われている。

調査はボランティアを専門雑誌などで募って行い、ほとんどの場合は参加費を支払わなければならない。中には大学の単位認定を受けられるものもある。ある雑誌には、10件以上のボランティア募集の記事が一覧表となって載っていた（BA,1990)。

こうして実施された発掘後の多くの遺跡は埋め戻すことなく、むしろ部分的にあるいは全面的に遺構を補強したり復元したりして活用されている。カペナウムの平面八角形を呈する4世紀の教会跡などは、それを管理する教会が遺跡を保護するため形態的には宙に浮

いた建物となっていた。一方では、エルサレムの旧市街ヤッファ門入り口付近の建設工事現場では、遺跡発見と事前調査にともない、工事は予定より遅れているという。

4．発掘方法と文化財の活用

事前に、日本の発掘調査方法とはかなり異なるという話を聞いていたが、結果として本質的には変わりはなかった。もちろん行政内の我々が行っているいわゆる緊急発掘調査と称する開発に伴う事前調査とは、短期間に、多くの場合平地で、広大な面積を掘り上げねばならないため、多少手順や調査の形態においては大きく異なるが、例えば日本の大学等において経験したいわゆる学術調査と比較すると全く違和感はない。おそらくテルのような種類の遺跡を自分が主体となって、同じような状況下で発掘するなら、イスラエルのような方法を取るかもしれない。

ローカスという概念も、通常の日本の発掘で行っている遺構、層位、グリッド等という単位で遺物を取り上げ、遺物と遺構の諸関係を認識するということとレベルや内容の差こそあれ同じである。ディレクター、スーパーバイザー、レジストレーター、写真係なども、通常、日本では一人で何役もこなしているにすぎない。異なるとすれば、例えば遺構の掘り方、石の抜き跡を土層に追い求めるかどうかと言うことや、出土した土器をすでにある型式名の中で分類してしまってフィールド記録としていくか否かということだろう。更に、グリッド内の土層に従い平面的に掘り下げ、グリッド間に残したボルクを層位の断面記録としてのみならず、グリッドボーダーラインとして強く認識し、出土遺物の整理に援用して従来の型式でなく形式・器種分類の中で作業を進めていくなら、いわゆる現時点における発掘は理想に近くなるだろう。特に、後者の認識は遺構が平面的になればなるほど、先史時代的になればなるほど必要になってくるだろうし、その結果、土器のみならず様々な時代区分としての型式認識も緻密になり、ひいては遺構間、遺跡間の諸関係の認識、歴史的解釈も進む。

そうした意味で、日本とイスラエルあるいはテルの調査法の両方を経験することは、より良い発掘調査につながると考えられる。

もう一つ。日本でもそれぞれの遺跡の種類、遺構の性格に応じたフレキシブルな調査方法が必要だろう。

日本より狭い国土とはいえ、1週間ほどの行程の中で遺跡の保存・活用のための発掘調査中の現場を5個所で見た。国の成立事情なり、聖書や信仰との関連を抜きにしては考えられないが、国の明確な方針があり、一括して国が管理しているならではのことである。国立公園として位置付け、統一したマークと説明板、多

遺跡を保存するため、宙に浮く構造をもつ
カペナウムの教会

くの場合有料ながらオフィシャルガイドは無料。その飲み食いも無料と言う徹底ぶりは、文化財としての活用以上の意図があるが、本来、文化財とはこれほどの資源を有するものである。

何かにつけ先立つものがというのが日本の実態であり、それより開発事業に追われ、というのが我々の実情であるが、イスラエルは今後の姿の一つを指しているようである④。　　（用田　政晴）

註

① イスラエル考古学発達史とテル・ゼロール遺跡の発掘調査成果からエン・ゲヴ遺跡調査に至る経緯や概要は、小川英雄『イスラエル考古学研究』1989年としてまとめられている。

② 1991年までのエン・ゲヴ遺跡調査の成果は、金関恕「エン・ゲヴ遺跡の発掘調査」『古代文化』44-2、1992年に紹介されている。

また、金関恕「旧約聖書時代のエン・ゲヴ遺跡」『文明発祥の地からのメッセージ、メソポタミアからナイルまで』(第4回大学と科学公開シンポジウム組織委員会編)、1990年もイスラエルの考古事情がよく判る。

③ イスラエル考古学の概要と発掘調査方法等の紹介は、小川英雄『聖書の歴史を掘る—パレスチナ考古学入門』1980年が詳しい。また、ユヴァリ・ポルトガリ　著・牧野久実 訳『イスラエルの遺跡』（"The Phenomenon of Tell, The Form of Tell Site"）,埋蔵文化財天理教調査団　研究会シリーズⅠ、1989年も判りやすい。

④ イスラエルでの発掘調査参加にあたっては、テルアビブ大学考古学研究所牧野久実氏の格別のご配慮があり、本小文の事実関係等についても、種々ご指導を受けた。また、現地での発掘調査や考古学の状況については、金関恕先生の親切なご指導、ご教示を得た。深謝。